

<研究ノート>

釜ヶ崎で活動するある修道女のライフヒストリー

庄司俊之

A Life History of a Sister Working at Kamagasaki

SHOJI, Toshiyuki

要旨：大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者や路上生活者たちの支援活動を行っている修道女、大野晶子さんにライフヒストリーを聞いた。最初に現在の釜ヶ崎の状況、その変貌する様子をどのように見ているかを説明してもらい、ついで、どのような過程をへて釜ヶ崎での活動に携わるようになったのか、自身の前半生について語ってもらった。

1927年生まれ。釜ヶ崎の危機的状況については原発労働者や監視カメラなど、硬質な言葉で表現した。それに対して出身地で幼少期にみた光景について聞くと、戦前の神戸がいかに国際色豊かだったかを語ってくれた。この原体験としてある多様性への感覚は、現在の危機意識と鮮やかにコントラストをなしていた。また、大正ロマンを生きたという両親からは「キリストに従うこと」や「慈善のわざ」を受け継いだ。しかし両親は、おんなは結婚して夫の家の宗教にしたがうべきとする伝統的な考えをもち、娘の入信には反対したという。これを押し切ったかたちで家を出て修道院に入り、第2バチカン公会議における「現代化」の思想や労働運動に携わっていた弟から「キリストの生き方」を学ぶなどしながら、やがて定年間近の年齢になって「つぎの段階へすすむ」ために大きな修道院を出て小さな共同体を生きることを考えるようになった。そのとき短期の研修として赴いた先のフィリピンでの経験こそ、彼女が釜ヶ崎で活動するようになる大きなきっかけとなった。

以上の事例研究は、たとえば福祉活動に携わるアクターの諸類型を比較研究する際の有益な材料のひとつにもなりえるし、また、福祉の思想や宗教思想を掘り下げようとする際にも有効な示唆が得られるはずである。

キーワード：釜ヶ崎、修道院、社会福祉、キリストの生き方、貧しい者の友

1. はじめに

本稿は、大阪・西成のあいりん地区（通称・釜ヶ崎）で日雇い労働者や路上生活者たちの支援活動を行っている援助修道会（カトリック煉獄援助修道会）の修道女、大野晶子さん（以下、シスター大野）にそのライフヒストリーを聞いたものである¹⁾²⁾。

最初にこの調査の狙いや意義について述べておく。言うまでもなく釜ヶ崎は日本最大の日雇い労働者の町であり、橋下府政・市政のもと、急速に町のありようが変貌していることもよく知られている³⁾。そうした変貌について、そこに携わるひとびとが実際それをどう見ているかを記録することも意味のある作業のはずである。以下の聞き取りではこれが入り口となる。が、調査者が興味をもったのはそれ以上に、釜ヶ崎で働いているこの女性がどのようにして釜ヶ崎に関わるようになったのか、ま

た、そこで何を見、どのような経験をしているのかということだった。調査者にはシスター大野の姿勢や精神的態度がそれ自体で記録に値する、生のスタイルにおける一つの範例⁴⁾に思えたのである。そこで以下のインタビューでは、シスター大野の前半生に多くの時間を割いた。

もともと東京・山谷での活動に関わった経験のある筆者⁵⁾が、その延長線上で釜ヶ崎のことも知っておかねばならないと思い、つてを頼りに案内してくれるひとを探し、そこで紹介されたのがシスター大野だった。その後、何度か私信のやりとりをし、その過程でライフヒストリー研究の着想を得た。以下で試みたインタビューは私的な交流に支えられた親密な雰囲気なかで行われ、その当日にも、あいまの時間を使って町の案内は続けられた。この点はインタビューのコンテキストとして最初に確認しておきたい。

また、この事例研究を今後発展させていく、いくつかの可能性についても急いで触れておく。たとえば支援者

の動機づけの比較研究がありうるだろう。いわゆる社会福祉の活動では宗教的精神を必ずしも必要としないのに対し、このライフヒストリーではそれが必要不可欠なものになっている。では、どのような違いがあるのかないのか。また、同じ宗教的精神に支えられた活動でも、たとえば「蟻の町のマリア」として知られる北原怜子⁶⁾と比較した場合、政治と宗教の結びつき方には明確な違いがあるように思える。このような比較研究にも開かれた事例であることを確認しつつ、本論に入っていこう。

以下では最初にシスター大野が語る釜ヶ崎の風景に触れ、そののち生育環境から入信をめぐる葛藤へ、そして信仰生活へと順次追いかけていく。

2. シスター大野が語る釜ヶ崎

最初に略歴を記しておこう。1927年生まれ、神戸出身。女・男・男・女・男・女・男・男の8人兄弟姉妹の長女である。インタビューの時点で87歳、しかし、みずから「健脚」というその足で、数時間にわたって釜ヶ崎を案内してくれ、現在は法人の施設長が急逝したため、ふたたび多忙な日々を送らねばならなくなった。

名刺にはつぎのように書かれている。「社会福祉法人釜ヶ崎ストロームの家」、その下に詳細として、「地域支援センター のぞみ作業所」「多機能型事業ストローム (1) 就労継続委支援ストローム (2) 自立訓練(生活訓練) ワルター」「ケアホーム/グループホーム ジョイ」が並んでいる。その他にリサイクルショップを運営し、精神障がい者に就労の場を提供するとともに、そこで出た利益をストロームの家の財政支援にあてていたが、最近では経営も難しいという。正月には越冬闘争を手伝いながらのボランティア研修があり、お盆には諸宗教での行事(慰霊祭)の手伝いなどがある。そして人権、憲法、原発、沖縄の米軍基地、秘密保護法などについての署名活動も行っている。

(1) ひとつの釜ヶ崎像

最初にお会いした際、開口一番に出た話題が原発労働者のことだった。最近、夕刻になると窓が黒塗りの見慣れぬバスや軽トラがやってきて、労働者を降ろし、待機しているつぎのひとを乗せて出発する光景がみられるのだが、あとで「おっちゃん」たちに聞くと、「あれは原発やで」と言うという。労働福祉センターが閉まった時間帯を狙い澄ましているらしい。その事実を確認するのは難しいが、釜ヶ崎がインフォーマルなダーティーワークを背負わされてきた歴史と、そのうえで原発の問題が

持ち上がった現在とを突きあわせてみれば、釜ヶ崎で働く者が感じる圧力の高まりはよく理解することができる。

インタビューの当日には監視カメラの増設が語られた。筆者が、どれが監視カメラなのか実はよく知らないと言うと、昼食時に外へ出た際、近隣の知人に問い合わせ確認したうえで、「あれが監視カメラだ」と台数を含めて教えてくれた。このように、釜ヶ崎のことを知りたいという筆者に対し、シスター大野は、ある切迫感をもって「いま・そこにある危機」を語ろうとしていた。

以下、数回のやりとりのなかで語られた話題を列挙すると、まず、(1) 現代日本全体の問題が濃密なかたちで釜ヶ崎に現れていること——たとえば原発や監視カメラと同様に、土地の転売問題について語られた。土地がそこに住まぬ者たちの手にわたり、投機の対象となる傾向が著しいという。この話題の系列には、児童福祉施設を利用している子どもの親たちがつぎつぎ釜ヶ崎の外へ転居してしまい、地盤沈下が起こっていることも含めていだろう。地域がそこに住む者たちの手から離れ、「空洞化」が起きているのである。また、(2) 釜ヶ崎で活動する諸アクター、たとえば複数の労働組合、さまざまな宗教団体同士の関係、労働福祉センター、赤ひげと言われた本田医師が「日雇い労働者にも医療を受ける権利がある」と考え創立に尽力した大阪医療センター、警察や暴力団などについて、説明と寸評があった。そして、(3) そこで活動するひとびとの小さなエピソードである。たとえば食堂の店主がお客の気持ちを理解するために実際に自分も日雇い労働者をしてみたという話や、クリスチャンのボランティアグループが訪問看護ステーションを立ち上げようとした際の苦労話など。

そのうえで、(4) 活動の難しさや意義が語られた。たとえば、ある支援グループに掲げられた「生活保護を受けている方はお断り」との但し書きについて、ここでの活動の重要な対象が生活保護さえ受給できないひとびとであること。また、ガス台を備えた台所を提供する「ラーメンづくり場」の看板について、ここではそうということが画期的に意味のある支援になるということなどである。台所を提供するというと一見些細に聞こえるかもしれないが、ここ釜ヶ崎では、行政がそれを拒否し、そのため許可をとって自前でつくらねばならず、その場を用意するにも多大な労苦があったという。その他、シェルターの利用方法や、炊き出しの際の物資の調達や配分は関係者が増えれば増えるほど難しくなることなど、活動を通じて見えてくるさまざまなことがひとつひとつ踏

破するように語られた。それに併せて、(5) 90年代の暴動や新聞紙上でも取り上げられた事件なども触れられた。

以上の語りからすでに明らかなのは、その網羅性と体系性である。おそらく以上を詳細に記述するだけで、ひとつの釜ヶ崎像が描き出せるに違いない。だが、それは別の機会に譲るとして、ここでは視点を変えて、そうした「釜ヶ崎像」を描き出している当のシスター大野そのひとに注目してみたい。

(2) 言葉に込められた思い

釜ヶ崎の変貌のなかで一番印象に残っているのは何かと問うと、つぎのような答えが返ってきた。南海電鉄の高架線沿いの両側には、昔はたくさん屋台が出て「びっちり」賑わっていた。いろんな国籍の顔がみられ、楽しい風景だったが、この2～3年のあいだに屋台を禁止する法律ができ、警察の取り締まりが始まって、今では屋台がみんななくなってしまった。「ぜんぶ、露店を追い出しましたよ。ちっちゃなものを売ってるひとまで許さない、警察が。もう条例で、路上でものを売ることはいできないから、路上は公共のものだから…（と言って）、だから、「綺麗」になりましたでしょ？ でも、ああいう露店がなくなると買い物客も減って、生活に困るおじさんが増えて、また悪いことが起きたりするんですよ…」。インタビュー当日もシスター大野はダンボールにDVDを積み込んだ男性と楽しげに語っていた。屋台の風景への共感がわかる場面だった。むろん、麻薬取り締まりの必要は認めるのだが、それを理由にいろんなものが「ゴミのように」捨てられたことへの怒りと嘆きは深い。

これは皮膚感覚でよくわかる話である。ただ、原発や監視カメラにくらべると、「屋台」や「露店」にはもう少し手触りのあるソフトな印象があるのではないか。そこに込められた思いについては、すぐあとの出身地についての語りをつうじて理解することができる。

また、インタビューが一巡したあとで、もう一度釜ヶ崎の現状に話が戻ってきた際にはつぎのように語っていた。府や市による釜ヶ崎の再開発によって、今ここにいる「おっちゃん」たちは住む場所を失うだろう、そして「あのひとたちはどこへ行くのだろうか？」と言うのである。いま、3つの小学校と1つの中学校を併設した一貫校が建てられ（その生徒募集のポスターは、地区外へ出ると大々的に貼られているのに、ここ釜ヶ崎では一切周知しようという様子がない）、また、釜ヶ崎のある新今

宮駅を関西空港と京都、高野山、熊野などをつなぐターミナル駅にして、観光を振興しようという動きがすすめられており、町を活性化しようと言われれば頷く者も多いにちがいない。だが、今・ここにいる「あのひとたち」のことは何も考えられていない。「自然に齢をとって死ぬよと思っているのかしらね」——この「あのひとたち」に込められた思いは、本稿の最後で触れることになるだろう。

このように、釜ヶ崎の状況全体について語る言葉は硬質なのだが、他方では折にふれて独特のニュアンスある言葉を語っていたように感じられた。そして、そういう印象をもった最初の言葉が「絶望」だった。

シスター大野は、初めてお会いした際に「絶望」という言葉をつかい、その後も何度かそうした表現を繰り返している。それはまず、第一義的には釜ヶ崎が圧迫されつつある客観情勢について言われている。圧迫が激しく絶望的であると。だが、その言葉を宗教者が語れば別種の響きをもつだろう。神はいないのか、というように。けれども、もともとこの「絶望」という言葉は、弟（故人）が生前に語った「人間の善性を信じられなくなることがある」に由来しているらしいのだ。もちろん、その言葉はすでにシスター自身の血肉と化しているのだが、5節(2)で触れるように、弟は「一番影響を受けた」存在でもある。だとすれば、この言葉は、もう少し独特のニュアンスや背景をもった表現なのではないだろうか。釜ヶ崎への関心の傍らで、シスター大野自身への興味が生まれたきっかけのひとつがこれだった。

3. 幼少期にみた光景

最初に生まれ育った神戸について、幼少期にみた光景について質問すると、そこには多くの国籍の人間がいたことが楽しげな思い出として語られた。「英国人ですよ、そしてあの頃は日本の植民地になっていましたが…台湾人と呼んでいました…台湾のひと、すごく自由で、いいひとがいっぱいいましたよ、そして中国、華僑のひと、南京市場とかやったり貿易商のひとたち、それから朝鮮のひと、その頃は韓国とは呼びませんでした、そしてあとは白系ロシア、それとね、時々ユダヤ人が…くる、いっぱい船ののって、そして3カ月か何カ月かいる、それから道にいっぱいものを広げて売る、真っ黒い服を着たひとたちがね。あの頃はイスラエルという国がなかったから、世界中を漂流してたんですよ。だから、神戸にも降りて…いましたね。（——インド人は？）ああ、いたいた、インドのひとがいっぱいいました、貿易商。子ども

も時代ですから、一緒に同じように教室で勉強して、そしてやっぱり弟たちもそういうひとたちと小さいときからつきあいがあるから、大人になっても仲良しで、ケーキ屋さんとか中華料理屋さんとか、お店やってるでしょ…」

この語りと、かつて釜ヶ崎の中央通りが多く国籍のひとびとで賑わった光景とを重ねあわせて受け取るのはたやすいのではないだろうか。ここには6節(2)で触れるフィリピンの経験も重なってくるに違いない。たしかにそうとは明言されていないが、しかし、かつての釜ヶ崎のなかに、多様性もつ喜び、苦しくとも共感できるものがあったこと、そうしたシスター大野の感受性の原型のようなもの(その反対に、何に対して危機意識をもっているか)の一端を、筆者はインタビューの冒頭で窺い知る思いがした。

続けて、戦前の記憶を語ってもらった最後につきのような語りがあった。「思い出に残っているのは神戸の水害…、小学校4年か5年のときでした、盧溝橋の事件が起こる前でしたかね、あれはものすごく怖かったですよ、ホントに。その頃から鉄筋コンクリートの小学校に切り替わったんですが、その屋上から見たときにね、…ホントに大きな、この部屋以上に大きな岩石と材木が、根こそぎ、濁流にのって、ばーっと流れてきてね、近所の家に当たる、そうすると木造でしょ、もう積み木のようにばーんと、流されていくのを目撃したんですよ。あれは怖かったですよ。だからまあ、3.11でわたしたちは映像で見ましたでしょ、あんなのを肉眼で、小学校のときに見たんですよ」

この「山津波」についての思い出は、エピソード的には本筋から外れた枝葉かもしれないが、記憶の語りが正確に「3.11」へと降りてくる印象があった。逆に言うと、これは単に昔語りをしているだけでなく、津波を直接経験したひとびとへの共感的理解を示した言葉とも受け取れた。上記、幼少期にみた神戸と釜ヶ崎における舞台の光景の2重のイメージもそうだが、このような想像力の働かせ方——過去と現在を行ったり来たりする精神の躍動——は、のちの語りにも通じていると思われた。

4. 父と母と入信問題

以上で釜ヶ崎や神戸といった舞台についての語りに触れたので、以下では少しずつシスター大野の半生、その道行きを追いかけていきたい。

両親は、「大正ロマンのなかで育ったんでしょうね…大恋愛の末に結婚しました」という。今でいうアウトド

ア系の父親と文学少女の母親、「あんなに趣味のあわないひとが結婚したのが不思議」とも。が、両親ともにクリスチャンではなかったものの、「イエス・キリストは好き、教会は嫌い」という点では共通していたという。「そのくせ教会の礼拝には行かせたんですよ、行かないと遊びにも行かせてくれなかった」——ここで「そのくせ」という言い方をしたことのなかには一種の屈託を見ることができるとも知れない。両親のすすめで行った先のキリスト教の世界に、まさに身をゆだねて入信したいと思ったその瞬間に、その両親とのあいだで葛藤が生じたからだ。とはいえ、シスター大野は、父親からは組織を嫌う感性を、母親からは宗教者は教会に属するだけで十分とは言えないという考えを、それぞれ受け継いだように見える。シスター大野は新約聖書のいくつかの翻訳を並べて読み、「キリストならこんなふうには言わなかったはずだ、キリストならこんなふうに言ったはずだ」と思ったと語ってくれたことがあるが、そのようにして「キリストこそ」と思い、「キリスト」をすべての基準とする精神的態度の少なくとも一端は、「大正ロマン」、もしくは自由恋愛の時代を生きた両親から受け取ったらしい。

父親は趣味人で、囲碁をたしなみ、ボートや釣りを楽しむ人物だったという。毎朝、摩耶山まで数キロの散歩へ娘を連れて行き、峠の茶屋で休むのが日課になっていた。また、公園へ行くと当時は必ず「乞食」がいたが、すると父親は娘にいくらかのお金を渡して「あげておいで」と言ったという。戦後になって「苦学生の押し売り」(祖母の言い方)が家に来るようになると、「誰も好きでああいうことはしない。ウソだとしても、買ってやろう」と言った。シスター大野は、こうして「慈善のわざ」の多くを父親から学んだと語っている。

他方、母親とのあいだには葛藤があったらしい。母親は怖く、一言で「母親には嫌われていると思っていた」。実際におばあちゃんっ子でもあった。が、あるとき、兄弟姉妹で話していたらみながそう思っていたことが判明して大笑いし、「自分だけ」と思っていた気持ちが少し氷解したこともあった。その後の話になるが、シスターが修道院に入ったあと、30代の半ばに、「あなたは院長でもないのにまるで院長のように振舞う」と責められ、苦しんだことがあったという。そんなときに母親が修道院を訪れ、こう語り合った。「母親が言うんですよ、それは仕方のないことだって。なぜならわたしがあなたを長男のように育てたからだ、弟たちを統率し、弟の嫁さんたちも言うことを聞くように、床の間に据えるように

して育てたのだからって。それを聞いて、ああ、と思いましたね。自分ではどうしようもないことだって。それから院長のところへ行って話しましたよ、自分はこういう人間なんですって…。母親の言葉が娘の苦境を救った一幕である。のちに晩年と言ってもいい時期になって、母親は娘の活動を認め、みずからも入信するに至った。自分が入るためのカトリックの墓地を、反対を押し切って買うまでもなったという。「葛藤はあったけれど、すべて和解しているという感じですね」と訊くと、「そうですね」という答えが返ってきた。

問題は、洗礼を受けたいと切り出したときに生じた。母親が口をきかなくなり、家が「真っ暗」になったという。両親の考えでは、女は結婚したら夫の考えに従うもので、だから長女の入信は認められないという。しかし男はそうではなく、だから第2人の入信は認められたという。筆者が「ご両親はいろいろ進歩的な考えをお持ちだったはずなのに…」と言うと、シスター大野は即座に語気をつよめ、「そう、やっぱり昔のジェンダーですよ」と応じた。

洗礼のことを切り出したのは戦後になってのことである。多感な時期に戦争を経験したことは、やはり大きな動機づけになったらしい。「焼け焦げた赤ちゃんの…、臭いは、ショックでした」「戦争が、いろんな変化というか、考える力とかを生じさせたんでしょね。それまで平安な生活をずっとしてきたけれど、戦争のときは本当にたいへんでした。…そうしたなかで終戦を迎え、どんでん返しでしょう、17歳でしたからね、口では言い表せないくらいショックでね、そのときからわたしには政府に対して反抗心が生まれました」。虚しさを感じたという。「こういう虚しいことはしたくない、社会奉仕に生きようと思ったんですよ」。一見すると、両親の教えに従って私立のミッションスクールの高等女学校に通っていた流れからすれば、洗礼へ傾いていくのはそれほど不自然とは思えない。また、たとえば軍国少年のそれのような、それまで信じていた国家社会に裏切られたというタイプの語りとも表面上はよく似ている。だが、揺らいだのは信念というよりも社会のほうだった。戦時中には外国の宗教ということでキリスト教は敵視され、戦後になると眼のまえには戦災孤児らがたくさんいた。だから、このとき「虚しさ」を埋めるためには、まさに社会に対するはたらきかけを伴わなければならない——この点は注意されていい。

しかし、母親からは「狂信」とさえ言われたという。だが、それはつぎの意味で違っているだろう。つまり、

もの心がつく前に通っていた教会は改革派のカルヴィン派のものだったとあとで知り、女学校は聖公会のものだったが、最終的に選んだ修道院はカソリックの援助修道会だったのである。この選択は、結果的にせよ、一応ひと通りの教会のありようを自分で見、そのなかから自覚的に選んだものだった。「わたしはこの修道会が大好きで選んだんですよ」とシスター大野は語る。したがって、この点では、その選択はきわめて合理的であって、何ら「狂信」的ではなかった。もし「狂信」的に見えたとしたら、それはつぎの意味においてだろう。つまり、両親から受けた教えを両親以上に徹底してみせるその強さが「狂って」見えたかも知れないということだ。しかし、その「強さ」もまた「長男のように育て」られたことからきているとしたら、シスター大野は何重かの意味で両親の教育の賜物ということになるだろう。

両親からの反対を受けたのち、しばらくは——「数年どころの話ではない」期間——洗礼を受けないまま、しかし信徒と同じような生活を送った。心のなかは「振り子のように揺れていた」——「今でもそうなんですよ」という。そして当時、修道院に入るには「洗礼を受けてから3年の者」という規定や年齢制限があったので、そこから逆算して、25歳で洗礼を受け、29歳で修道院の門を叩いた。決断の際には、主人を亡くした叔母の助言を受けた。この点でも、シスター大野の思考の道行きはきわめて「合理的」だった。そして広島修練院へ持っていく荷物の準備と発送の手配は友人に協力してもらい、ひとりで旅立った。父親とは家を出る前に喫茶店で長々と話したという。賛成の言葉は得られなかったが、この線だけは譲れないという話をして、暗黙の了解をえたと感じた。

その後、父親は脳梗塞を起こして倒れ、3度目で亡くなった。「わたしのせいで病気になって苦しんだ」と長らく思っていたらしい。が、亡くなったその日がちょうど復活祭の朝だったため、父親の死という現実と直面した真っ只中で癒しをも感じていたという。

5. 修道院時代

(1) 力を蓄える時期、そして「現代化」

念願の修道院生活について聞くと、「行ったら行ったで（今度は）帰りたくて帰りたくて仕方がなかった」という。「まあ、スパルタでしたね。うちはスパルタではなかったのね…。それまで自由な生活に慣れ切っていたので時間を区切られ何かをすることが辛かった。修道院長からは「あなたほど帰りがるひとはいない」と

言われた。また、先ほど触れた、「院長のように振る舞う」と言われた問題などがあって、本人は「早く45歳になればいいと思っていた」という。45という数字は「そのくらいの年齢になれば下の人間も増えるから」という目安にすぎない。だいたい中堅くらいのポジションになれば素直に自分を出しても軋轢は減るだろうと思ったのだ。が、この時代はただただ耐えただけではなかった。インタビューの終わり近くでは「イエスの宣教生活、公的生活は3年間だけ、眼に見えないそれまでの30年間はとても大切」と語っているが、シスター大野の修道院における20年間も、「無我夢中で生きた時代」であり、多くの栄養を吸収し、力を蓄えた時期だった。

広島で3年を過ごしたあと、東京・市谷へ移って寮長を任された。その寮は、夜間の学校へ通うひとたちが多く、そのなかでは年長だった。「今度の寮長、怖そうなひとね」と噂されたらしい。仕事は「穴埋めなんです」という。どこかに必要があればそれを満たすのが「穴埋め」である。あるときには倒れる者があって、それで看護の知識が必要とされた。そうすると聖母看護専門短大で3年間、聴講生として、免許はとらないでいいからと看護を学ぶことになった。そうした経験も「ここ(釜ヶ崎)にきてから役立っている」という。

入ってから3年すると初誓願を立てる。それから3年ごとに(ひとによっては1年ごとに)有期誓願を更新する。そして6年目に終生誓願を立てるのだが、そのまえの1年間(10カ月)が第3修練期と呼ばれ、1カ月の大黙想ののちに最終テストを受け、それを通過すると財産を放棄して「永遠に」会に受け入れてもらうことになる(当時の規則)。この間に「会の精神は、ばっちり学んだ」。辞めようとは1回も思わなかったらしい。「辞めようと思うくらいなら最初から行かない。大好きな家も家族も捨てたんだから、貫かなきゃね、やっぱりそういう覚悟が要ります、それほどのものでしたよ、自分の人生、ぜんぶ捧げますからね」。

イグナチオ・ロヨラの霊性に惹かれた。「日本の言葉で、人事を尽くして天命を待つって言うじゃないですか。イグナチオもそうだったんですよね、自分たちがすべきことは徹底してする、そのうえで神さまにお任せする、という精神がね、ばっちり(手をたたく)、ありましたからね…」。

イグナチオの『靈操』はむろんのこと、援助修道会の会憲でいえば、26条「キリスト者として正義のために戦い…」、29条「選択する際には、忘れられている人々、人間の尊厳を傷つけられている人々、福音の告知をもつ

とも必要としている人々を優先させる方向を取る」、そして50条「清貧が人々の連帯のしるしでなければならぬ」が「もっとも大切にしていること」である。また、この修道会は「勧誘をしない、施設をもたない会」であるという。「その時代、地方自治体から頼まれてそうするしかなかったんですが、アジアでは(学校や福祉施設などを)もちました。が、本来、もたない会で、困っているひとのところへ出掛けて行ってお友だちになるという会」「社会で働く、ひとびとのなかで働ける会社」であるという。そうやって社会へと開かれている点こそが、敗戦以来、シスター大野の求めてきたものだった。

それだけでなく、こうして広がっていく交わりに「境界がない」ことも魅力だった。「生と死を超えて、死後も、困っている罪びとのために、自分の…、ふつうの言葉でいえば恩赦をね、そのひとに譲るとかね。世の終わりまで、わたしたちは煉獄にいるのかなという感じで…、だから、生と死を超えたところまでわたしたちは奉仕するという考えも大好きだったんですよ、生きてるあいだけじゃなくって、死者に対する尊敬も大きいし…」。これを「限界なき奉獻」と呼ぶらしい。「亡くなったひとたちとも交わるというかね、それはやっぱり日本人の考えともあうかなって」。

／修道院に入って6年目に始まった第2バチカン公会議(1962-1965)からも大きな影響を受けた。この公会議はカトリックの組織と教義を「現代化」しようとするものだが、宗教者が世俗から離れて超然的な態度をとるのではなく、積極的に、いま目のまえにある社会に関わろうとする姿勢に共感した。その延長線上で、公会議以降に南米で実践された「解放の神学」⁷⁾にもシンパシーをもった。今日「解放の神学」は必ずしもカトリックの主流を占めるとは言えず、シスター大野も「精神は必要、生き方としてはそっちに傾くが、ブラジルは(日本とは)状況が違う」と言う。「キリストが地上に降り立ったように、その国の文化にあった生き方に変えていく」のが大切という。

シンボリックなのは「修道服を脱ぐ」という実践だろう。その実践自体は公会議以前からフランスなどでなされていたが、「現代化」の流れで、日本でも少しずつ取り入れられるようになった。「これ(修道服)を着てることによって、日本では、宗教家として、それだけで尊敬される存在になるでしょ。修道者なんですよ、ああそうですか、失礼しましたとなる、なにが失礼なのか知りませんけどね。そういうものから解放されて、ホンモノで接する、そういうことをわたしたちは選びました」。

こうした考えは、シスター大野の視線からみれば、もともと母親から受け継いだものであり、それを「現代化」が補強したかたちである。もちろん伝統の重しから解放されることには安きに流れる怖れがあるから、だから「昔より難しいですね」という。しかし、だからこそ「解放されたなかで（清貧・従順・貞潔などを）守るのには価値がありますよ」とも言うのである。たかが服ではなく、そこには自己を社会に対してどう向かいあわせるかという問題が集約されている。

1978年には1年間、カトリック教会の修道女を対象とする養成コースを受講し、現代の教会の動きをあらためて学んだ。その研修の一環で沖縄やフィリピンにも行った。沖縄には3回行っているが、この頃は激戦地の爪痕が今よりずっと生々しく残っていた。そうした見聞は今日、沖縄の基地問題を考える際にも大事な原体験になっている。

政教分離原則を強調し、政治や社会から目をそむけるタイプの宗教者もいるが、シスター大野はそうではない。「宗教と政治と社会は関係している、みんなつながっている」と言う。宗教が政治に介入するのがよくないのはもちろんだが、「宗教というのは神を崇め奉ることでなくって、生き方だと思ってるんです。そしたら、自分の宗教は大切にすけれど、それこそ狂信じゃなくてね、自分の生き方をひとつひとつに示す、それは人間放棄じゃないし、より人間的に生きることだから、ひとつひとつに、社会も政治も論じるんですよ」。

そして、社会的実践への志向は援助修道会全体で今にも引き継がれているとして、2種類のパンフレットを取り出したうえで、一方は「福祉」をテーマにしているが、他方は「グローバル化する世界への対応」をテーマに掲げたと説明してくれた。さらに、「大きな建物をもって…（という教会のあり方）というのは、だんだん時代遅れになっていくでしょうね」と「現代化」の未来についても考えを語ってくれた。

(2) 「一番影響を受けた」弟

公会議の頃の話聞いた際に「その頃『蟹工船』を読んだ」とのコメントがあったので、読書体験についても尋ねた。入信前に大仏次郎『バリ燃ゆ』を読んで感銘を受けたこと、山崎豊子はぜんぶ読んでいたこと、最近図書館へ行って丸山眞男の蔵書がなくなっていたことなどが語られたほか、「講談社の聖イグナチオ・ロヨラ」（フランシス・トムソン『イグナチオとイエズス会』）が印象深かったという。『靈操』のことかと思ったが、それ

は基本的すぎて、そうではなかった。「あれを読むと、スペインとかポルトガルの、植民地を獲得していた時代のことがせんぶ出てくるんですよ、それが面白かった」という。宣教師に付随して、宗教を利用しながら商人や国王たちが野心を実現していくことが「すごいなあ」という。もちろん否定的な意味である。あわせて十字軍や免罪符などにも触れ、「教会の汚いところがいっぱい」と表現した。

そこで語りはすぐさま「弟」のほうへ移行していった。「弟は、そういうので嫌になって教会に行かなくなったんですけど、わたしは嫌にならないで、イエス・キリストに従おうと思った」という。弟は「教会や神父に躓いた」が、シスター大野は「それは人間だからいろいろあるでしょう、でも…」と考えた。その違いについては「男と女の違いかもしれませんけどね」と突き放したうえで、しかし、その弟こそが「一番影響を受けた存在」であるという。

「すぐ下の弟でね、1年半しか変わらないから、小さい頃からホント仲良しで、どこへ行くのも2人一緒に、わたしは妹のようでした。…一緒に生きて、お互いに影響しあって、お嫁さんがわたしと弟のことを妬くんですよ、だから遠慮してあまり話さないとか…」

「やっぱり、おんなじようにカトリックの教えを（受けて）…、わたしはカトリックの悪いところをいっぱい聞いてから（カトリックに）行ってるけど、弟は、小学校を卒業してすぐでしょ、純粋にカトリックの教えを受けてますね。だから…、本の裏表紙に「聖母マリアに捧ぐ」って書いて自分の名前を書いたりね、そういう思春期のはじめに入った信仰は消せないですね。だから、いくら組合の役員になっても、信仰はしっかり入っていて…、貧しいひとたちの友であるキリストの生き方を生きていましたね、あとでわかりました、それが、亡くなってから」

ここで「キリストの生き方」として紹介されたのが「退職金ゼロ」のエピソードである。弟が定年退職後、退職金が降りた形跡がないので母親が尋ねると、「そんなものあるか」と答えたという。そして母親が、「いくら（組合員をしていたので役職に就けず）ヒラでも、そんなはずないだろう」と重ねて食い下がると、「それで生活が困ったか？」と言いつつ放った。母親は、シスター大野に何度も電話で「（あれでは）離婚されるかもしれない」と心配していたらしい。結局のところ弟は、退職金をそのまま組合員や困ったひとつひとつに配っていたということがあとになってわかった。

ただし、ここは注意して聞くべきところだろう。シスター大野が「影響を受けた」のは、結果的にあとでわかった「退職金をすべて配る」行為だけではない。「影響」はそれ以前から始まっていたのである。まず、もっとも親しい肉親への愛情があった。そうした愛情を育む、日常的な小さな相互の影響関係があった。そのうえで、「教会や神父に躓いた」様子を至近距離で目撃したのである。また、弟が、労働組合の視察でポーランドに行って当時のワレサ議長と面会し、帰国後「日本の労働運動は200年遅れている」と嘆息した、その「がっかりした声」を聞き、そうしたなかでこそ、「人間の善性を信じられなくなる」という「絶望」を間近で聞いたのである。ここに、弟が尽力した活動が「わたしの思惑ですが、彼は周囲に利用されていたんじゃないか」という思い、悲劇的状況を重ねてもいいだろう。しかも、弟については単に「利用されて」可哀想というのではない。弟は、「仮に利用されていたとしても、寅さんのように、わかっていてそれを知らないふりのできるひとでした」という。「そういうふうには生きられないひとだった」というのである。だから、「退職金ゼロ」という行為は最後の蒸留水のようなものなのだ。むしろそれ以前に、何度も躓きそうになりながら、なんとか信仰を守ってきた「生き方」、苦しみの軌跡があった。弟からの「影響」は、それなくしては十分理解することができないと思われる。

シスター大野の語りでは、じつは弟よりも父親のほうが多く登場する。質問の仕方もあるだろうが、自然と口に出た印象だった。しかし、父親からは「慈善のわざ」を学んだが、「生き方」を学んだのは弟のほうからだった。弟は、「生き方」の、そして「絶望」の先達でもあった。そして、じつは「キリスト・の・生き方」のうち、これは後半の「生き方」を指しているにすぎない。前半の「キリスト」についてはもうひとつのエピソードを俟たねばならない。

6. フィリピンから釜ヶ崎へ

(1) 沈黙の世界

インタビュー当日、筆者は、映画「大いなる沈黙へ」のポストカードを手土産に持参した。「何かと一筆必要などときがあると思うので、その際に利用下さい」と。この映画は、アルプス山脈のフランス側に建つグランド・シャルトルーズ修道院という男子修道院の内部を撮影したドキュメンタリー作品で、公開当時、修道生活の静謐さが話題になっていた。筆者は、カードを渡すときに

「シスターの求める生き方とは違うかもしれませんが…」と簡単な感想を述べた。

「(当時の) わたしたちの修道院生活はね…、厳しい沈黙の世界だったんですよ。だから、なんにもわからない、規則によって動く、頂いた指示によって動く…、それはある意味で守られた生活なんですよ、悪いものをなにも見ない、耳にも入らない、誰も言葉にも発しない、だから、ホントに守られた世界だと思いますね、厳しい沈黙だけの世界というのは」。当時の修道院では誰かに何かを伝えるにもメモを渡したという。それだけ規則は厳しかった。

正確には、ここで「沈黙」という語を使うのはやや不適切かもしれないのだが、筆者にわかるよう、そのまま使うと断ったうえで、シスター大野は続けた。沈黙は大事であり必要であり、否定はしないし、そこには深い祈りがあるのはたしかだという。だが、いまはコミュニケーションの時代だから、それだけでは足りず、公会議で求められたのはそれではないだろうと言うのである。

20年間にわたる大きな修道院での生活を離れるきっかけは、教会全体の動きが理由だった。修道会所有の施設の運営をめぐる方針転換があり、このままでは公会議の精神、「JPIC (正義、平和、和解、被造物の調和)」が実現できない、家族を捨てて出てきたのにこれでいいのかと考えた。「どうしても意見の相違があるじゃないですか」という。そうした思いが募り、やがて限界に近づいていった。

これは、「信仰の危機はなかったか」との質問に対して「2度はあった」と答えたそのひとつである。だが、これは「危機」ではあっても正確に「信仰の危機」にあたるかどうか。というのも、シスター大野は「修道服を脱ぐこと」と「(修道院内での奉仕から) 社会へ出ること」については何ら揺るぎがなく、また、「もうそろそろ定年だと言われていたから、そうだったらわたしは次の段階に入りたい」と考えたからである。その点では、むしろきわめて一貫していた。ただ、当時の意識としては一直線の飛躍だったとしても、また、あとから振り返ってそうだったとしても、「動機は矛盾していたかもしれない」ともいう。よくよく自分の精神状態を吟味してみると、積極的に何かを求めることのなかに、後ろ向きで逃げ出そうとする気持ちがあったかもしれないというのである。

ともあれ、短期の研修の意味で旅立った先のフィリピンで、シスター大野は「そこでホンモノのキリスト」に出会うことになる。マルコス政権が革命で倒れ、アキノ

政権が成立したすぐあとの時期である。

(2) フィリピンでの経験

「その家庭は奥さまとお父さん、子ども3人、長女とそして次男と末っ子が男の子で、小児麻痺だったんですよ。そしてホテルの…天井がなにもない、もう空爆か何かでやられたホテルの区切った一室に、住んでてね、6家族くらいいるんですよ、大きなホテルだから。誰が建てたのか知りませんが、アメリカ人が建てたかスペイン人が建てたか、とにかく放置されたホテルがあって、そこに屋根を貼って、トタンか何かを置いて、雨露を凌いでいるんですけどね、そして雨が降ったらみんな外へ出て、タライを持って行って洗濯をするというようなところだったんですよ、もうびっくり仰天したんですけどね(笑)。そこを紹介して下さったのは、向こうのフィリピンの修道会のシスターなんですけどね、そして修道院に泊めてあげると言われたんですけど、わたしはやっぱりそういうところ(スラム)の経験をしたいからと言って…、そしたらトイレはない、シャワーもない、もちろんお風呂もない。そしてお部屋は…これくらいの大きさ(6畳間)もないですね、もうちょっと狭い…、そこに低いベッドがあって、ベッドと言っても柵のような…、そして炊事場があって、こっちは出入り口になってて…、そのひとつしかないベッドにわたしを寝かしてくるわけですよ、そのお母さんが。いつもお父さんが寝てるんだけど、あのひとはホテルの夜中の仕事があるからいいんだと、いつもそうなんだと言うからわたしも信じて…(苦笑)…寝かせてもらって。あなたたちは?—わたしたちはいつも床に寝てるからと、お母さんは小児麻痺の子どもを抱いて。でも、小児麻痺の子どもさんはわたしが抱いて寝てあげるわって言ったんですけどね、いい、いい、疲れてるからゆっくり寝なさいというわけですよ。で、ふたりの子どもがわたしの足許できれいにくるまって寝ていると。そして明るく日、朝起きたらね、缶々のコーヒーを買ってきてくれるんですよ、そして…これくらいの食パン、へたを切ってあって、1センチくらいのが2枚、お皿に載っていて、そしてマーガリンかバターがあるんです。わたしがびっくりしたのは…、この缶のコーヒーは甘くないから、もう少しお砂糖がいるだろう、エルマナ(スペイン語で「マザー」「シスター」の意)は好きだろう?とか言って持ってきた。わたしが、みなさんは?って言ったんだけど、もう済んだって言うんですよ。わたしもいい気持ちで食べた…、子どもたちはわたしのほうをじいっと見ている、欲

しそうなんだけど何も言わないからわたしも平気で食べたんです。そしてみんな海へ遊びに行つて貝を獲ったりして…、お昼はあちらの方、あんまり食べないんですね、そして夕食になったとき、1匹、鯖か鯵のようなお魚がお皿にひとつ、載ってくるんです。それにナイフとフォークがついていて、ご飯と醤油、キッコーマンの醤油ですよ、が…、でも、見たけどみんな食べる様子もない、え?と思ったら、これはエルマナのためだって言うですよ。え、わたしだけ?—みんなはあとで食べるって言うんです、そうなのかなあって…わたし、単純でしょ。でも、のどを通らないですよ、みんなが見てるから。そして少しだけ食べて、ごちそうさまで言ったら、途端に子どもたちが、ばーっと、みんなでそれを、手で。ご飯も手で食べ出したの。びっくりして、あら、あなたたちまだだったの?って言ったら、お母さん、お客さんが来たらいつもこうなんだよって。だから…、お客をよくもてなすんだけど、自分たちが普段食べていないものまで買ってくる…。それからもうひとつわかったのは、お父さんが夜勤というのはウソでね、わたしを泊めるために外で野宿してた…(寒くないからできるとはいえ)だから…、わたしもうびっくりして…、(現地の)シスターに話したら、みんなああやって、気持ちよく泊まってくれるのは恵みだと思って喜んでそうしてるんだから、もうそうして下さいって言われてね、…だから、わたしも内職を手伝ったりお魚を釣りに行ったりして…過ごしたんですよ。だけどシャワーもないでしょう、でも、長女がシャワーしたいかって聞くんですよ、したいけどないでしょって言ったら「ある」って言うんです。そして連れて行く…そしたら四角く囲ったところがあるの、天井はないんですけど、それをね、開けたら石や瓦の欠片がいっぱい置いてあって、そこでね、みんなシャワーするんだって言うんです。水道もないのにどうやってって言うと、お水はバケツに入れて買ってくると。それを洗面器に入れて…、シスターが恥ずかしくないように、見えないように、女の子が上の窓からじゃーっとかけてくれたりね、ホントにびっくりしたんですよ、お水は買わないといけないのにシャワーのお水を買ってきてくれる…。だから今でもね、わたしはね、庄司さん、水道を使うたびにそのことを思い出して涙が出るくらい。…そういうことで、わたしは本当に、ああ、ここはキリストの愛が生きている、ここにはキリストがいる、わたしもこのように生きようと思ったんですよ」

以上、やや不釣り合いなまでに長く引用したが、シスター大野が釜ヶ崎へむかう原体験がまさにここにあっ

た。その意味についてはすぐあとの釜ヶ崎のくだりで確認したい。

(3) 釜ヶ崎へ

帰国後、フィリピンでの経験を生かしてそういうところへ行きたいと考え、知り合いのシスターに相談して助言をもらい、東京・山谷、横浜・寿町、そして名古屋などを逐一まわった。このように、きちんと見極めたうえで選択しようとする態度はつねに一貫していた。山谷では、山谷争議団とマンモス交番、金町一家がまだ抗争している時代を目撃した。横浜では、キメの細かい活動を見、「いい仕事をしている」と感じたという。が、そんななかで釜ヶ崎は、規模も大きく活気もあり、そのぶん零れ落ちる者の数も多く、「悪徳企業」による「収奪」も激しかった。そうしたひとつとを公的サービスにつなげるだけでも対応に追われ、「仕事はふんだんにあった」。シスター大野が最終的に選んだのはそうした場所だった。1989年のことである。

活動の初期には、外国から出稼ぎで来た女性の売春問題に関わって、そういう問題はしばしば暴力団絡みだから命が危ういと忠告されたこともあったという。寄せ場に多いとされる同性愛者にも接し、彼らが差別されることに関して「聖書に男色は悪いとか罪だとか出てるんですけど…」、それは時代によって受け取り方を変えるべきものと言う。風紀をうんぬんする者もいるが「そんなことくらいで風紀は乱れない」——そう語るとき、その背後では「修道服を脱いだくらいで修道者の精神は乱れない」という考えが反響しているように聞こえた。

そして、フィリピンの経験が釜ヶ崎で2重写しになってくる。

「釜ヶ崎に来てからは、釜ヶ崎のおじさんたちの生き方を見て、慰められることが多いですね。わたしたちに遠慮しない、いいですよいいですよとか言わない、ありがとうございますって素直に受ける、そしてそれをまたお友だちに分ける、もう明日にとっておこうなんて思わないで友だちにわけてあげる、その態度とかね、…日本人って慇懃無礼なところがあるじゃないですか、結構ですよって言いながらもらいたいとかね、でも、ここの貧しいおじさんたちは欲がないんですよ。…キリストの時代の貧しいひととかフィリピンの貧しいひとたちとはね、やっぱりそういうふう生きてきたんじゃないか。キリストも家がなかったら野宿してたわけでしょう、違います？ 放浪の旅とかね、そしていろんなひとの家に行って寄宿して、出されるものを頂いて食べてあり

がとうございますと言って、だからあいつは酒呑みだとか言われたりもしてるわけですけどね。何も持たないひとの…、どう言うのかしら、単純な生き方のなかにある…、真実味というかね、ホンモノというのを、ここにきてすごく見るんですよ、わたし。ウソいつわりのない生き方。…ここのおじさんたち、汚い格好をして何か変なことを言っている、おじさんたちの生き方を見ていてね、すごいなあって思うんですね。…うーん、ああ、人間ってこういうふうに生きられるんだって。…まあ、ピンとこないかもしれないけど、わたしの言い方。それでもね、やっぱりホントにね、人間って、なんにもなくなっても生きられるン。そして生きてから、助けもくる、素直に受ける、我をはらない、そしてまたそれをみんなに配る…、なんかそういう生き方がね、もしみんなできたら戦争も起こらないのになあって思うんですけどね⁸⁾」。

ここで見出された「キリスト」とその「生き方」は、さらに自分自身に跳ね返ってくるだろう。フィリピンでの経験についての語りでも、現地のひとが海で排泄する習慣に触れ、当時はそんな海で獲れた魚を食べる気持ちになれなかったと述懐している。だが、海には汚濁を浄化する作用があるのであって、「病気になるのは日本人ばかり…」とも語っている。そこではむしろ、そうした躊躇のほうこそが問われている。

それと同様というべきだろう、「やっぱり、この貧しいおじさんたちとともに生きるとなれば…、おじさんたちは、新幹線にも乗ったことがない…、携帯も持ってない、ホントに今日を生きるのさえも精一杯というか、病院にもかかれぬ、保険証も持ってない…。わたし頭が痛いから、じゃあ明日病院へ行ったらいい、というような気楽な生活をしてますが、ここのひとたちはぜんぜんそういうことがない、恩恵を受けていない。かと言って、そのひとたちと同じ生活をすればいいということではないんですけど、少なくともそのひとたちの友である限り、できればそれに近い生活で、ともにやっていくというのをわたしは選びたい」とシスター大野は言う。

これは、彼女が個人的に実践している質素な生活に通じているだけではない。釜ヶ崎で活動するキリスト教系の諸団体が協約を結んだとき、「宣教はしない」という約束事が確認されたほか、互いの財産放棄が問題になったのである。現実にはなかなかうまく行かないわけだが、それを語るとき脳裏に「できればそれに近い生活で」という考えがあったのは想像に難くない。

(4) 静謐と喧騒のあいだ

しかし、「危機」にはふたつめがあった。弟の組合活動と同じように、シスター大野も釜ヶ崎という場所で活動して、そこで現実の困難に直面し、あるとき躓きそうになったのである。

「この釜ヶ崎でも、解放を叫びながら、解放に行かないような生き方をする支援者がたくさんいました。家でも企業でも教会でも、支援者の側、警察もそう。日本の学校、日本の家庭で育っているじゃないですか、それがとくに男性の場合は染みついていますよね…。あるとき「おっちゃんたちの側に立って戦わなくてはならない」場面があった。そして戦った結果、ものすごい反発が返ってきた。「女が、とか、ボランティアが、とか、そんなことを言う権利がない、とか。じゃあ、あなたたちは何のためにここに来てるんですかと言ったら、すごく激高して、怒って、あなたにそういうことを言われる筋合いはない、と。…そのとき外国人はフォローしてくれたけど、日本人の男性たちは誰ひとり、そうではなかった…。それで、なんでこんなところで働かなくちゃいけないのかしらって、そのとき思ったんですね」「ホントにショックだったんですよ、信じて一緒にやっていたのに、尊敬していたひと、このひとならば、と思っていたひとが、いざというときに…。それで「ああ日本だ」って思ったんですよ」。

当時、女性は2人だった。周囲には「男の世界の見苦しさ」が感じられ、「人間の弱さ」を見たような気もした。男たちの態度は横柄で、「おっちゃんたちを利用して自分たちの名声を得よう」ということも感じられた。「釜ヶ崎のなかに日本社会、男社会の構造をみて、ショックで、ああおんなじだあと思って、日本の社会構造、文化構造というのはなかなか崩れないなあ」と。それならば「もうここにはいたくない」——そのときはそう思ってしまったという。

ちょうどその頃、トラピスト修道院に黙想のため行っていた折、修院長から「このシスターたちにフィリピンでの生活を話してください」と言われ、禁域にも招き入れてもらった。そのとき一瞬、「祈りと労働に専心しよう」という気持ちが脳裏をよぎり、そのあと神父と自分の折れそうな心についても話した。すると「一緒に祈りましょう」と言われ、8日間、祈るだけの生活ををした。先ほど「沈黙の世界」について批判的に語ったので、シスター大野はあらためてニュアンスを確認するように、「祈りと労働だけの世界への憧れはいつもあるんですよ」と繰り返した。そして最後の日に神父はこう言

ったという。「巷から援助修道会がいなくなるのは淋しいですよ」と。それに対してシスターは、「神父さん、わたしも今朝そう思ったんですよ」と答えたという。イグナチオの『靈操』に「荒みのとき」という言葉があって、そうなる何れもかもうまく行かなくなったり、祈れなくなったりするというのが、あれは「荒みのとき」だったと振り返る。神父とは「あれは誘惑でしたね」と語られたらしい。そして、「また釜ヶ崎に帰ります」ということになった。

一見すると、シスター大野の歩みは、家を捨て修道院へ、そして修道服を脱ぎ社会へ出て、さらにフィリピンを経由して釜ヶ崎へと、一步一步着実に階段をのぼってきたように受け取れる。けれども、修道院に入るまでの逡巡を「振り子のようだった」と表現するように、この一連の語りでも、大きな眼でみれば、修道院の静謐な世界と俗なる社会的世界の喧騒とのあいだを「振り子のように」揺れてきたことが見てとれる。そして、そうした「振り子」の運動が彼女の力となってきた面もあるのではないだろうか。

7. おわりに

(1) ふたたび「絶望」をめぐる

ここまで話を聞いて、筆者が最初に気になった「絶望」という言葉に立ち返って質問すると、シスター大野は急いで「軽い絶望」と言い換えた。筆者のこだわりが過ぎたのかもしれないと、その点は恐縮した。が、おそらく軽重の問題ではないので、フィリピンや釜ヶ崎で出会ったことについては揺るぎがないのですねと確認すると、「そうですね、それはねえ…」と応じてくれた。「だから、それはもう基本で、だから、おいちゃんたちはそういうことは自覚してないけど、キリストが生きられたように、生きてますね、ホントに。それはすごいなあ。そこに救いがあるなと思います。わたしたちが救いうんぬんしないでもね。…だから、こういう話はあんまりわかってもらえないかもしれないけど。…でも、わたしは、やっぱりね、「絶望」だけど、そこに望みも、光りも、救いも癒しも見ますよね」と言う。しかし、翻ってつけ加えるかたちで「でも、「絶望」って気持ちがばーってきますよね」とも。

やはり、釜ヶ崎をめぐる社会情勢がきわめて厳しいという現状認識が強くある一方で、やや未分化なまま、そこに独特の宗教的なニュアンスが重ねられていると思われた。つまり、「悲惨」という言葉を使って図式的に言うなら、社会学の認識や社会福祉の実践が往々にして所

有の規則を変えないまま、したがって支援者の存在はそのまま変えずに「悲惨」のみを軽減することをめざすのに対し、ここではもちろんそこに「悲惨」も見るとはいえ、まず第1に、同時にそのなかに共感するものや肯定すべきものを見出すのである。そこには視線の向きかえがある。そのうえで第2に、「悲惨」を生み出し助長する社会が批判され、その点は社会学等と同じに見えるけれども、「悲惨」がすべて除去されるべきものと捉えられているわけではない。むしろ、「悲惨」のなかに豊かさを見出すことをしない態度——福祉行政すら含まれるかもしれない——こそが排除を加速させていると、そう受け止められているように思われる。こうした視座は、私的な信仰に閉じこもるタイプの活動では必ずしも自明ではないだろう。そして第3に、自分や自分たちの生き方を、むしろ「貧しい者たち」のほうへ近づけることが模索されている。この点は、行政的な福祉の発想とは根本的に違っている⁹⁾。シスター大野はインタビューの終わり近くで「信仰をもつことで苦しみます」と語っているが、だからと言って信仰を手放したほうがよいとはならない。それと同じように、彼女の「絶望」は、釜ヶ崎のひとびとのなかにキリストを見出しその友であろうとすることと一体なのだ。筆者はキリスト者ではないが、そこまでの「絶望」（と肯定）をもったことがありますかと、逆に問い返された思いがした。

(2) 信仰と活動

このあとの話はふたつの方向へ分岐していく。ひとつは信仰のかたちについてである。言葉に頼りすぎた話が続いたため、そうではないこと、たとえば外国人と接したときに翻訳を使わずに話して却って真実味が感じられたというエピソードや、幼い頃にみた映画の話、ちょっとした娯楽をつうじてでも信仰について考えさせられること、そして夢のことが語られた。「わたしは父親の手の感触をよく覚えているんです。それが夢のなかで神さまの手と一致して…、そのときから信仰が揺るがないんです」と。以下、釜ヶ崎からは離れすぎるので、ここでは触れないこととする。

もうひとつは、最後にあらためて釜ヶ崎での活動についてである。「わたしのことなんかどうでもよくって…」と、シスター大野は最後に自身が取り組んでいる活動の切実さを訴えた。半日かけて話を伺い、夕方近くになってからさらに1時間もインタビューは延長し、「労働者、貧しい者というのは形容詞というか」と、それまでの話を打ち消すかのような勢いで、問題の具体性が強調

された。それはアルコール依存についてであった¹⁰⁾。

自分の家では飲酒する者がいなかったもので、最初は避けて通っていた。しかし、あるときそれが病気だと理解した。はじめ、断酒会を開こうとしても酒屋が反対し、一般の病院も受け入れず、精神病院に入れられることが多かった。社会全体の問題意識は低く、軽く見られている傾向にあるが、いったんアルコール依存になると、ウソについてでも、家族や仕事を捨てても吞もうとし、誰からも嫌われ、自分自身を傷つける病気なのだ。ある医師は、「がんよりも惨めな病気だ」と表現したという。そういう問題の深刻さと無関心の落差が甚だしく大きいなかで、じつは誰もが陥る可能性のある病気でもある。シスター大野は釜ヶ崎にきた当初、ドイツ人宣教師ストロームが建てたアルコール依存者の支援施設でボランティアをしたが、そこで少しずつアルコールの問題の重要性に気がついた。「カマ（釜ヶ崎）で生きて行くことを決意させた大きな理由はこれなんですよ」。

近年では、日雇い労働者が高齢化して働けなくなって、路上生活に陥ってアルコール依存になるといった従来のパターンよりも、裕福だったり教育があったりするにもかかわらず、アルコール依存になって釜ヶ崎にくるパターンや、発達障がいや処方薬中毒その他、従来ではみられなかった複雑で多様なパターンが増えていて、スタッフの対応も難しくなっている。アルコール依存は、釜ヶ崎のなかでだけ起きる問題というよりも、日本全国で起こっていて、釜ヶ崎がその受け皿になるといったかたちへ構造が変化しているのだ。「行政も社会もそのことをよく理解していない…」のに、釜ヶ崎という受け皿さえも失われようとしていることに焦燥感はある。

以上の問題意識を、シスター大野は「キリスト」という言葉を一切使わずに言い切った。自分の信仰などどうでもいいのだという口ぶりだ。そして、そうした施設がまだまだ不十分な現状だから、「この施設はなくなってもいいんだ」、しかし、こうした活動はなんとしても残したいのだと繰り返した。

インタビューを終え、公的生活におけるシスター大野の姿が最後に戻ってきたかたちだった。

注

- 1) インタビューは2014年9月27日、釜ヶ崎のグループホームジョイの一室で行われた。午前中に、シスター大野からインタビューを受けるにあたってのまえおきとなる話があり、そのあと昼食を挟んで午後4時間程度、テープレコーダーを回したかたちでインタビューを実施し

- た。7節で触れた1時間程度の延長はそのあとのことである。ただし本文は、筆者が2012年から2回にわたってシスター大野に釜ヶ崎を案内された際の経験や談話も含めて書いた。その後、最初の原稿をまとめたあとで、2014年12月10日、2015年1月5日に追加のインタビューを実施した。
- 2) ライフストーリー研究は本来、語り手となる人物の人間像を、聞き手の一方的な解釈を排しながら再構成する点に意義があると考えられる。その点では、今回の記述は少々聞き手の解釈を書き込みすぎた面があるかもしれないと怖れている。ただし、ライフストーリーの語り手は、インタビュアーが誰なのか、また、インタビュアーとの関係に応じて語りの内容やニュアンスを変えるのであって、だから、筆者が語り手とどういう関係にあるかについて、また、その言葉が出てくる前後の様子もなるべく書き込もうと心がけた。筆者が書きすぎたかもしれない「解釈」もまた語り手に折り返して伝えてある。ライフストーリーは「聞き手と語り手の共同制作物」という考え方があがるが、本稿がライフストーリーたりえていずればそうした意味においてである。ライフストーリー研究法については、(中野・桜井; 1995)等を参照のこと。
- 3) 釜ヶ崎については、シスター大野から、向学のためにと(上畑; 2014)(ありむら; 1987)を贈って頂いた。筆者からは、近年の傾向を示す一例として(原口・白波瀬・平川ほか; 2011)を贈っている。その他、(本田; 2006)などを参照のこと。
- 4) 「例」という言葉は、一般的な何かを説明する手段として、「数あるなかの一例」として使われるが、実際の人生において一般性は事後的に発見されるにすぎず、存在するのは個々の比較を許さぬ出来事や軌跡だったりする。ライフストーリー研究は比較研究を排除しないけれども、一般化される以前の個性性を復元しようとするところにその研究の意義のひとつがあると考えられる。そうした視座は、人生を一個の芸術作品として眺めるのに近いだろう。ここで「範例」という言葉を使ったのは、そうしたことを念頭においている。(青柳; 2006)を参照のこと。
- 5) 山谷については(今川; 1987)(ファウラー; 1998)などを参照のこと。筆者自身、未発表ながら「山谷の歴史的地層と現在」(2010)という文章を書いたことがある。
- 6) 「蟻の街のマリア」北原怜子については(一番ヶ瀬・津曲; 2000)を参照のこと。また、伝記的な研究に、(大石; 2011)(大條; 2012)がある。しかし、映画や舞台などでよく知られていることを思えば、研究上の無関心は際立っているのではない。
- 7) 解放の神学は、第2バチカン公会議以降、中南米のカトリック司祭らが主導した神学運動である。社会的抑圧や貧困を主要なテーマとし、政治運動とキリスト教神学の接点を探る。今日ではフィリピンやインドネシアへも広がっている。ただし、バチカンには批判者もあって、カトリック系の学校では必ずしも教えられることはない。「福音と世界」(64-8, 2009)が「解放の神学の現在」を特集している。
- 8) (金菱・大澤; 2014)の第5章は「ホームレスとしてのイエス・キリスト」と題されている。「イエスは財布を持たないことを生き方として選択し、当時の不平等を認める社会制度に敢然と立ち向かうことで、制度に適応できない人びとを救い出す、いまで言うセーフティーネット的なあり方を社会的に実践していた」という。シスター大野が「おっちゃん」たちを「すごい」と言い、そこにキリストを重ねるとき、同様の理解が示されていると思われる。
- 9) フーコーによれば、真理と主体の関係は「デカルト的契機」をはさんで2種類に大別できるという。近代において真理は主体による認識の対象であり、主体はなんらの変容をへないでもそれに到達できると仮定される。しかし、古代的な真理観によれば、主体を変容させないものは真理の名に値しない。真理に到達するためには主体を変形する実践が必要とされ、具体的には「浄化、修練、放棄、視線の向き変え、生存の変容など」がそうした実践にあたるという(Foucault; 2004, 18-23)。これは晩年のフーコーが、近代的主体の相対化とともに革命的主体の系譜学などを含めた研究プロジェクトに着手した段階で出てきた概念図式だった。「キリストの生き方」をめぐる語りは、その多くをフーコーの図式にトレースできるように思われた。
- 10) アルコール依存については(河野; 1992)を参照のこと。

文献

- 青柳悦子、2006、「範例性と文学—デリダの論考から(1)」『文藝言語研究文藝篇』49、95-151。
- ありむら潜、1987、『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記』日本機関紙出版センター
- ファウラー、エドワード、1998、『山谷ブルース—「寄せ場」の文化人類学』洋泉社
- Foucault, Michel, 2001, L'herméneutique du sujet : cours au Collège de France, 1981-1982, Gallimard. (=2004、広瀬浩司・原和之訳『ミシェル・フーコー講義集成11 主体の解釈学』筑摩書房。
- 原口剛・白波瀬達也・平川隆啓ほか、2011、『釜ヶ崎のススメ』洛北出版
- 本田哲郎、2006、『釜ヶ崎と福音—神は貧しく小さくされた者と共に』岩波書店
- 一番ヶ瀬康子・津曲裕次、2000、『北原怜子(シリーズ福祉に生きる)』大空社
- 今川勲、1987、『現代棄民考—山谷はいかにして形成されたか』田畑書店
- 金菱清・大澤史伸、2014、『反福祉論—新時代のセーフティーネットを求めて』ちくま新書

- 河野裕明、1992、『久里浜『アルコール病棟』より—臨床30年の知恵』東峰書房
- 中野卓・桜井厚編、1995、『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
- 大條あこ、2012、「戦後の貧困家庭における子どもへの援助に関する研究：蟻の街の MARIA 北原怜子の記録から」『桜美林論考 心理・教育学研究』3、49-67。
- 大石さちこ、2011、「私が見てある記 蟻の街の MARIA—北原怜子の生涯」『共済新報』52（2）、29-31。
- 上畑恵宣、2012、『失業と貧困の原点—「釜ヶ崎」50年からみえるもの』高学出版